

【佳作】

糸屑

家野未知代・京都府

我が家斜め向かいに、氷室さん夫婦が住んでいる。

夫の道夫さんはタクシーの運転手をしていたが七十歳を機に車を降り、いま八十歳。妻である栄子さんは、自宅で洋裁の仕事をしている。用事で伺った時は、いつも玄関口に風呂敷包みがある。私が不思議そうに見つめると、

「御直しが仕上がったし、もうすぐ取りに来はるねん」

と言う。イメージオーダーも引き受けているとの事。一着いくらの代金を頂くのに、毎日コツコツと糸との暮らしをしてきたのだろう。口数少なく、人の事をとやかく言わない所が、それを思わせる。子どもが無く、友人と付き合いも少ないようで、この夫婦と道で出会うことがあまり無い。

かなり前のことだが、夫婦寄り添つて歩く後姿を見た。道夫さんの腰は「く」の字で、足の膝も曲がつたまま。急いで歩くので、左右に揺れる。栄子さんが横でかかえ、倒れないようにしている。人目につかぬよう急いでいるのだと分かるが、驚きのあまり見つめたまま立ち尽くしてしまった。

それから後は、様子伺いをするようにした。道夫さんの病状は益々進行し、パーキンソン病と診断が下りたようだ。自宅での一人介助を続ける栄子さんを、たまに労う。

「ほんまに、ようやるねえ。ヘルパーさん来てもらたら？」

「どうもあらへん。お風呂に入る時だけ、溺れんように見なあかんけど、後は何とかなる」

その頃も、玄関には風呂敷包みがあつた。

一年前の早朝七時、栄子さんが我が家のインター ホンを鳴らした。

「ちよっと助けて！ 座らせそこねた」

私は急いで。栄子さんが助けを求めるなんて、よっぽどのこと。玄関続きの部屋の押入れのねきに、道夫さんがしゃがみ込んでいた。

「ど、どうしたらしい？」

「一緒に抱えて！ 座らせさえしたら——」

痩せてきている道夫さんだが、全く力を入れてくれないので、持ち上がりない。二人で力を合わせ、やつとのことで、押入れを利用したベッドに座らせることが出来た。すると道夫さんは足腰を曲げたまま、ゆっくりと寝転んだ。

他の壁の二面を使って机が備え付けられ、流れ作業で仕事が出来るようにしてあつた。洋裁をしながら、道夫さんのすぐ傍に居て、小さな声も聞き漏らさないようにして暮らしてきたのだろう。

窓のない四畳半のその部屋は薄暗く、手元を照らす電気スタンドがコーナーごとに取り

付けられている。何十年も前の形をしたアイロンは、周囲の白の中で重々しい黒で映えていた。焦げたりほつれたりしているアイロン台のその上を、擦り続ける栄子さんの指先の軌跡が、何重にも重なつて私の脳裏に写し出された。

二か月前、氷室さんの家の前で救急車が停まつた。飛び出して行つた私に、夫が気管に食べ物を詰めたと栄子さんは説明し、「覚悟をしてるんや」と落ち着いて話す。

入院手続きが難しそうで不安だから、同行してほしいと言う。パジャマなどの買い物も含め、その日は一日付き合つた。

病院通いをする栄子さんの一人暮らし始まつたが、やはり、玄関に風呂敷包みは置かれていた。

栄子さんと話す機会を増やした方が良いのではないかと考え、タンスの奥に仕舞い込んだ若い頃の濃いブルーのワンピースのリフオームを頼むことにした。大きく広がるギヤザースカートなので、六十代の私にはとても恥ずかしく、もはや着れなくなつている。

「キユロットにしたげよ。解くわ。どんなに小さくても、私は布を切り捨てられへんのよ」

三日後、動きやすそうなキユロットを仕上げて持つて来てくれた。そして、支払いはいらぬと言う。

「世話になつて……私は他には何もでけへん。出来るのは縫いもんだけ」

家に上がるよう勧め、茶菓で接待した。揉めながらも、支払いを受け取つてもらつた。キユロットを広げてゆっくり眺めていると、糸屑が付いていた。摘んで取る。そして、

栄子さんの孤独と向き合つた。彼女の言葉が、私に纏わりついで離れない。

「私の両親は、早よ死んでるの。三十歳頃に、居て欲しい頃に親は居ず、身寄りもないねん」

険しい顔で、うつむいた。

「私の遺影などいらん。飾る人が何処に居る？ 清水寺の合祀墓に入れてもらうんや」内緒話のように、声をひそめた。

「とこどんまでここで暮らしたら、ケアハウスに行くわ。その費用はもう用意できた」作り笑顔の裏から、辛い悩みがのぞく。

また一つ、糸屑を見つけた。